



一般社団法人アグリフューチャージャパン

Agriculture Topics

「校長就任より3ヶ月間を振り返る」 日本農業経営大学校 校長 堀口健治



堀口 健治：早稲田大学政治経済学部教授、学部長を経て、同大学常任理事、副総長を務めた。また、2002年から2004年までは日本農業経済学会会長。同大学定年退職、早稲田大学政治経済学術院名誉教授、2015年3月から日本農業経営大学校校長。

初代校長の岸康彦さんの後を受け、2015年3月12日に校長に就任した。正直、1学年20名は対応しやすすい規模と受け取っていた。長い間、大学で教育に従事し卒業生20名を担当した時期もあったので、ここでは4ゼミだから平均1ゼミ5人、担当教員と協力すれば、そうハードではないと思ったからである。だが、実際のスタッフの仕事は想像以上に重い。3月初めの第1期卒業式に立ち会って、彼ら自身の経営計画を聞き就農に至る努力、それを実現するカリキュラム等を支えるスタッフの苦労、を知ることになった。未来の農業経営者を目指し、就農するために広く学ぶ必要があり、経営力、農業力、社会力、人間力の4分野のカリキュラムを用意している。就農を希望する学生が集う本校では、就農につながる

各種の活動をガイドし、就農出来るようにする必要がある。経営を開始するための農地取得と農地法3条許可申請、助成を受けるための青年等就農計画の提出等々、準備を具体的に教示しなければならぬ。販売のための実践的なマーケティング論もそうだし、運転資金を含むファイナンス論も具体的である。他国に比し遅れている日本の就農教育に、そのモデルをここで創出したいとする創設者たちの思いが反映している。

これに比べ、一般的な大学は、紹介や応援はするにしても、学生をジェネラリストとして送り出す傾向が強い。企業へのエントリーシートは各人が出し、必要な企業人としての教育は就職後だとして、大学内教育は職業教育的側面が薄く抽象的な科目が多い。

本校では1年次の先進農業経営体での4か月農業実習、2年次の3か月企業実習を含みながら、カリキュラムは実践的である。就農を意図した仲間である学生は、これらのハードな勉学を2年間の寮生活も通し乗り切る。生涯の同志も当然に出来る。

学費や寮費を賄うことが出来る青年就農給付金をほとんどの学生が受けているのはありがたい。就農を条件とするこの給付金を受けた親元就農予定の学生も、親の経営をそのまま継承するだけではなく、部門新設を考える学生が多いのも印象的である。自分の名前で借りた水田に酒米を植え姉妹ブランドの清酒販売を計画した学生もいる。

卒業研究はこうした自らの経営の夢を実現可能な経営計画にまとめ発表するもので、指導教員の努力は大変だが、よくまとまっている印象を得た。大阪出身で兵庫県に新規就農を果たした卒業生は、有機栽培の野菜と稲作、そしていずれはキッチンカー、という経営計画だが、着実に具体化する新規独立・自営就農のモデルになるものだろう。月刊誌『現代農業』8月号に「地域の人の心をつかんで独立就農したG君」として書いたが、文中で紹介した彼の努力は多くの人に強い印象を与えたようである。

まだ出来たばかりの当校だが、就農教育のモデル創出とその実践結果を示すべく、教職学生一体となった努力が継続される。大いに期待していただきたい。



日本農業経営大学校

Japan Institute of Agricultural Management

※本誌の無断転用・転載を禁止します。

[発行人] 一般社団法人アグリフューチャージャパン

〒108-0075 東京都港区港南2-10-13 農林中央金庫品川研修センター5階

TEL：03-5781-3750 FAX：03-5781-3752